

## アイルランド自由國

長 壽吉著

ドーバー海峡を挟んで今を謂の英獨抗爭、全世界の耳目を擧げて切迫せる對英上陸作戰に集中されつゝある際、獨逸のアイレ自由國に對する外交工作——アイレ自由國の歸趨こそは世界史の將來を決する一要因と考へられ、花々しく新聞紙上を賑はした事である。地理的には大英帝國の頭腦中樞を形成すべきと思はれる此の國の行動は一見怪奇なものと見られるであらう。而し之を歴史的に見るならばその根ざす處は愈々深い。

時恰も學界の膏肓にして西洋近世史の權威たる著者によつて本書の公刊を見た事は時及びその人の寔に宜しきを得たものと云ふべく、殊に著者は昨年華中の壽辰を迎へられ後猶も墨蹟として健筆を揮はれてゐる事は我々同學の者にとつても非常な喜びであると共に心強さを感じる次第である。

本書は「イングラントとアイルランドとの關係の上に觀たアイルランドの歴史」を略記されたものであり、「自由國の生じた由來」が極めて手際よくまとめられてゐるのである。即ちイングラントのアイレランド征服以來國內問題殊に英國憲政史上に重大なるアイルランド問題は切り離された純粹政治問題としては支配者と被支配者の鬭争であり、純然たる宗教問題としては二種の異教——新舊兩教徒の相剋であり、純經濟問題としては搾取階級と被搾取階級との對立として分析的に把握されるであらう。本問題が英國

内政の癆と云はれる所以のものは此等の中どれ一つでも容易ならざるに具體的な歴史の上では此等の鬭争、相剋、對立が同時存在的複合運動をとつて來たが故に、更に人種的偏見すらが加はつて展開して來た所に存するのである。従つてアイルランド人の願望は單なる宗教上の緩和、亦單なる土地問題の解決により満足される筈はなく結局向ふ所は完全なる自治であり、自由國の設立であつた。此の目的に向つて合法的には議會を通じ、非合法的には鮮血を以て闘つて來たのであつて、本書十節の内容も亦自ら此の鬭争の歴史を形成するのである。同時に之は英國の弱點を示すものであり英國の敵の必ず着目する所であつた。アイルランド問題が屢々英國内の問題を起えた所以も亦此所に存するのである。

「古來英國が他國と戦を交ふる場合に、佛蘭西革命政府ナポレオン及び北米合衆國等よりの英國攻撃は常にアイルランドに向けられた歴史の如く、獨逸海軍の用途は、常にアイルランドに存し、且つ獨逸の策略は、アイルランドの英國に對する反抗を利用するに存したが故に……」(九〇頁)なる第一次歐洲大戰の際の條々は時局に鑑み最も興味深く讀まれたのである。

實に一國の動向を決するものは現在の經濟問題もさる事ながら、その國の歴史的背景が重大な意味を持つ事を忘れてはならない。外交の要訣はかゝるものを知り相手におのがじし志を遂げしめながら同時に之を利用するものでなければならぬ、本書の如き書が今後とし／＼公にされ、世の有識指導者階級を啓蒙せん事を望むもの切なるものがある。

猶序でながら、最近讀んだアイルランドに關する外國書として A. Rivoallan: L'Irlande (Collection Armand Colin N°170 1934) があるが本書は歴史よりも、前書に於て比較的手薄と思はれた個所即ちアイルランドの文學、アイルランドの地理的様子、アイルランド自由國をとりまき最近迄の國際關係等。アイルランドの現勢を主體とした書物であり、良心的に書かれた書たる事を認めるのである。叙上二冊の和洋の書物を以てすればアイルランド自由國の解明は殆んど完全に近き事と思はれる。敢て江湖に薦むる次第である。(弘文堂發行、五〇錢)(豊田堯)

Boggs, Whittemore S. International boundary; a study of boundary functions and problems.

(Columbia University Press, 1940.)

著者はいふ、何れの大陸にも國境問題がある。有效にこれを解決するには須らく平和的手段によるべきだ」と。寔に國家のあるところ必ず國境があり、國境のあるところ必ずこれを繞つて係争がある。アジアには滿ソの國境問題があり、ヨーロッパにはドイツを中心として多くのそれがある。北米には合衆國、カナダの對立があり、南米にもペルー、チリー、アルゼンチンの國境を繞つて紛争がある。更に尙、數多くの問題が世界の各地に認められてゐる。かゝる國境問題は將來も尙、地球上に國家の存続する限り

絶えることのない問題である。この國境の沿革を察し、そのなす機能を觀て、更にそれにかゝる問題を論じ、進んでそれに解決の鍵を與へんとしたのが本書である。

アメリカ國務省の地理學者である著者が一昨年のコロンビア大學に於ける自らの講義「現代地理學の諸問題」を刊行したものの、この講義が時局的示唆に富むが故に敢て出版して江湖に問うたといふ。

第一章、第二章に於ては國境の意義を述べ機能を論じて本書の緒論となしてゐる。第三、第四章に於ては本書の中心問題をなすべき合衆國、カナダの國境を説く。第五章より第十五章に互つては南米、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、各大陸に於けるこの問題に瞥見を與へて前者との比較に資し、更に水上に於ける國境にまで言及してゐる。最後の第十一章に於ては國境問題の平和的解決策を論じて本書の結論に代へてゐる。尙ほ、附録には世界各國の國境の長さの表、合衆國、カナダ國境に關する外交文書等が載せられてある。東亞に、西歐に、風雲急を告げ、國境の變改が着着實行に移されつゝある今日、かゝる本書が世に送られたことは興味深い。

本書の個々の章に對する批評は暫く之を措くが、全體に亘つて之を通觀するにどこか淺薄さがある。國境の長さや國の面積との比を表示し、或は人口との比率を求めて、その軍事的役割を論じてゐるあたり、ゾーパンの地理的壓力商の方法を思はせる。かゝる方法は國境問題に對しては多大の示唆を與へるものであらう